

社会林業普及へのファーマーフィールド スクール手法導入後の成果 —ケニア国半乾燥地社会林業強化計画からの報告—

阿部 真士

はじめに

2004年からJICAの技術協力プロジェクトとして開始されたケニア国半乾燥地社会林業計画(Intensified Social Forestry Project in Semi-arid area: ISFP)が2009年3月をもって終了した。このことはケニア国において20年以上続いてきたJICA社会林業関連プロジェクトの終了を意味する。本プロジェクトがファーマーフィールドスクール(Farmer Field School: FFS)手法を社会林業普及分野に適用させた経緯や、FFSの内容に関しては小川慎司元専門家によって既に本誌No. 65中で紹介されている。しかし、ISFPが実施されていた、これまでの5年間で得られた多くの成果や予想していなかった正のインパクト等に関しては、まだ報告されていない。それらの成果は20年以上続けられてきた社会林業関連プロジェクトの集大成として、決して恥ずかしくないものであると筆者自身は感じている。そこで、ここではFFSの特徴を簡単に述べた後、この5年間で得られた成果、プロジェクト効果の持続性を述べ、今後の社会林業関連プロジェクトの参考になることを期待することとする。

FFSの三本柱

FFSは非常に柔軟性に富んだ普及及びエンパワーメント強化のための手法であるが、FFSのセッション中で絶対に外せない3つの活動がある。ここ

では、その活動の一つ一つの意味合いを再度、説明したい。

(1) 農業生態系分析 (Agro Eco-System Analysis: AESA)

AESAとは検証デザイン(Participatory Technical Development: PTD)と呼ばれる比較試験区に植え付けられた作物や樹木等を毎週、測定・観察する活動のことで、通常20名程度のFFSグループメンバーを更に3つ位の小グループに分けて、①観察・測定、②その結果の模造紙への書き写し、③書き写された模造紙を使ってのプレゼンテーションを毎週、実施する。AESAは、いわばドリルワークのように毎週行われ、その過程を通して農民達の観察眼が養われ、「農民エキスパート」になるための礎を築いている活動であると思って良い。これまでは畑への播種後、自分の畑へはあまり足を運んでいなかったが、AESAを通して畑を観察する習慣ができたので、病害虫の発生を早い段階で発見することができ、結果として収量の増加に繋がったとか、これまで農村部の女性達は、あまり人前で話す機会がなかったが、AESAのプレゼンテーションを通して、人前で堂々と話せるようになったという話が良く聞かれる。また、ISFPは社会林業のプロジェクトであるので樹木のことを多く扱っているが、成長の遅い樹木の測定は1回/月、作物の測定は1回/週に実施する等の工夫をしている。

(2) グループダイナミクス (Group Dynamics)

Shinnji Abe: Outputs after Implementing Farmer Field School Methodology for Social Forestry Extension — Report from Intensified Social Forestry Project in Semi-Arid Area of Kenya
現イーストアングリア大学、元JICAケニア国半乾燥地社会林業強化計画専門家

グループダイナミクスとは FFS を通して学んだことやメッセージを歌の歌詞に載せて歌ったり、踊ったり、時には地域の環境や生活の問題のことを寸劇にして伝えたりする活動である。FFS のメンバーの中には年配者や文盲のメンバーもいるため、そういったメンバーもグループダイナミクスを通して学んだことの再確認ができる。また、参加型開発で有名な英国サセックス大学のロバート・チェンバース氏の本を読むと「Fun」という単語がたくさん出てくるらしい。やはり、参加型開発の基本は楽しむことなのであろう。

(3) 特別課題講義 (Special Topics)

特別課題講義は FFS のグループメンバー達が学びたいことを学ぶ時間である。農村での生活は決して林業関連の活動だけで成り立っているわけではなく、農民達は食料自給や販売のための農業も行っているし、家畜の飼育や保健衛生の活動等も彼らの重要な生活の構成要素である。ISFP では多種多様なグループメンバーの特別課題講義に対する要請に答えるため、1 回/月の外部講師派遣（通常、地域の専門分野の普及員である）の費用を補助している。

このように FFS は大変バランスの良く取れたストラクチャーを有しており、農村部に住む人々にとっては決して優先順位の高くない森林関連の活動にも興味を示してもらえることが出来た。以下、



写真 1 AESA (観察・測定) の様子

ISFP による 5 年間の活動を通して得られた成果のいくつかを紹介し、どのような教訓が得られたか触れることにする。

成果

(1) 苗木生産本数及び植栽本数の増加

ISFP による FFS では卒業¹ 前の 6 週間は Final session という FFS の総まとめの時間に充てている。Final session の中では、FFS を通して得られた技術の理解度や比較試験区の分析、FFS 卒業後の活動予定等がグループ内で話し合われるが、Farm Self-Assessment というセッションの中ではグループメンバー達が穀物の収量や苗木生産本数、植栽本数の増減を通して自分達の農地の中で、どのような変化が起きたか確認しあうことが行われている。ISFP ではプロジェクト目標の指標を対象農家と近隣農家の苗木生産本数及び植栽本数の増加率にしているところ、このセッションで得られたデータをプロジェクト評価用のデータとして活用した。ここでは、その Final session で得られたデータを下に FFS 実施前と実施後の対象農家と近隣農家の苗木生産本数及び植栽本数を紹介したい。また、近隣農家のデータに関しては、FFS のグループメンバーから 3 名を選び、それぞれの農家から 2 名の近隣農家を選定し（よって、計 6 名）、インタビューによってデータを入手した。

図 1 は 2007 年 4～5 月に FFS を卒業した 74 グループ、約 1,200 名の農民達を対象に前述の Final session を通して得られた FFS 実施前と実施後の苗木生産本数と植栽本数の推移である。苗木生産本数、植栽本数共に 2 倍以上に増加していることが分かる（苗木生産本数の増加率は 255%、植栽本数の増加率は 120% である）。

図 2 には同じく 2007 年 4-5 月に FFS を卒業した 74 グループの近隣農家 444 名の FFS 実施前と実施後の苗木生産本数と植栽本数の推移を示した。近隣

¹ Farmer Field School と呼ばれるくらいなので、卒業式も行われる。卒業式では修了証書の授与のみでなく、FFS を通して学んだことの発表も行われる。

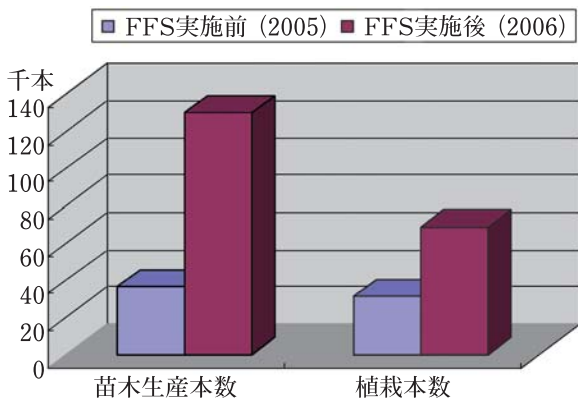


図 1 FFS 対象全農家の FFS 実施前後の苗木生産本数と植栽本数の推移

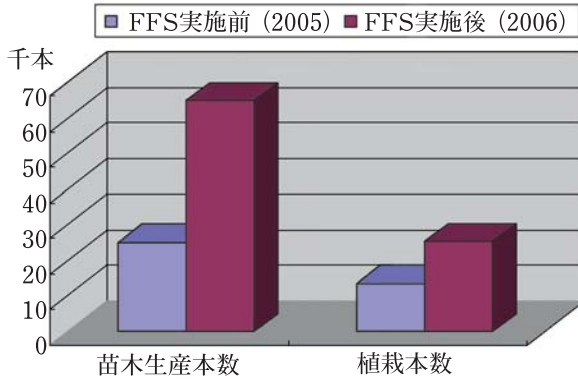


図 2 FFS 対象グループの近隣農家の FFS 実施前後の苗木生産本数と植栽本数の推移

農家へのプロジェクトからのインプットは通常、2～3回/年程度、実施される Field day² くらいであるので、この増加率（苗木生産本数の増加率は 159%、植栽本数の増加率は 88% である）は特筆に値する。また、調査をしていないので、詳しいことは定かではないが、この近隣農家の増加率の高さは FFS グループメンバーが自発的に FFS を通して学んだ技術や知識を近隣農家に伝えたり、PTD の様子を見たりしたこと等にも起因しているかもしれない。

(2) エンパワーメントの強化

エンパワーメントという言葉に定義付けることは難しいが、ISFP では FFS を通して、今まで時間にルーズであった農民が時間を守るようになったとか

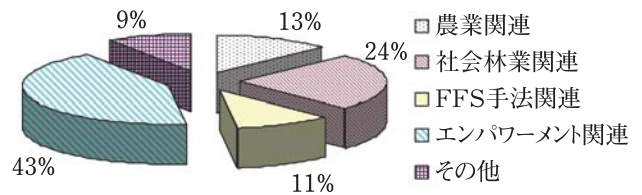


図 3 「FFSでの活動を通して自分自身、どのように変わりましたか?」という質問への返答割合

(FFS は通常、週に 1 回、午前中のみに行われ、時間割も存在する)、人前で堂々と話せるようになった、グループ内にルールが出来た、活動資金の管理が出来ようになった等の変化を総じてエンパワーメントとしている。FFS が農民達のエンパワーメント強化に有益であるということは、前述の Final session 中で行った FFS グループメンバーに対する「FFS での活動を通して自分自身若しくはグループとして、どのように変わりましたか?」という質問への返答から察することが出来る。

図 3 に「FFS での活動を通して自分自身、どのように変わりましたか?」という質問への返答数の割合を示した。ISFP は社会林業（農地林業）のプロジェクトであるため、そのカテゴリー内の苗木管理や接木、根切り等の技術が身に付いたという返答も多かったが、最も多かったのは上述のようなエンパワーメント関連の返答であった（「グループとして」の質問の返答も同じ傾向を示した）。この結果から FFS はグループのキャパシティ・ビルディングや農民自身のエンパワーメントの強化に大変効果的であるということが推察できる。この成果を引っ提げて、FFS 卒業後、グループ活動よりもっと大きな組織活動である FFS ネットワーク活動³を展開させるわけであるから大変効率的である（組織活動に必要な基本的なことを既に上述のように FFS 活動を通して培っている）。

²Field day とは FFS のグループメンバーが日頃の学習成果を近隣農家や各省普及員、NGO 関係者に発表する日のことである。

³FFS ネットワーク活動とは FFS を卒業したグループ同士が集まり、協同組合のような活動や FFS の実施自体を行うことである。

予想していなかった正のインパクト

(1) ISFPによる社会林業普及 FFS の他プロジェクトへの応用

ISFPではプロジェクト開始間もなく、FAOの支援を受け、実施ガイドラインを作成し、そのガイドラインに従って、キツイ、ムベレ、タラカの3県でFFSを展開させてきた。FFSの導入時には、「仕事量が多すぎる」、「こんな手法はうまくいく筈がない」、「どうして、森林普及員が農業分野の指導もしなければいけないのだ」という不平不満の声も森林普及員達から挙がっていたようである。しかし、FFSを展開させていくうちにFFSの良さに森林普及員達は気づき始めていった。また、FFSが開始された初年度は、社会林業普及分野の専門家とカウンターパート(C/P)が頻りに現地指導に出かけることによって、FFSセッションの質を保つことに大きく貢献した。このような活動が実を結び、現在ではC/P機関のケニア国森林公社で実施されることになったアフリカ開発銀行のグリーンゾーンプロジェクト(Green Zone Development Support Project: GZDSP)とエチオピアのJICA技術協力プロジェクト等でISFPによって確立された社会林業普及のためのFFS実施システムや各種ツールが活用されている。このようなインパクトはプロジェクト開始前には予想されていなかったことである。

(2) 世界銀行によるJapan Social Development Fund (JSDF) の承認

JICAの技術協力プロジェクトとしてのゴールはProject Design Matrix (PDM) 上のプロジェクト目標や上位目標の達成かもしれないが、FFSとしてのゴールはFFSネットワーク活動であろう。ISFPのプロジェクト期間中には、プロジェクトが集中的にインプットした3県では、いくつかのネットワークが立ち上がったが、社会林業関連の経済活動を始めるための原資が入手できなかったため、具体的な活動を開始することが出来なかった。しかし、FAOの協力によりJSDFに申請するためのプロポーザルをケニア国森林公社が作成し、世界銀行に

提出したところ、そのプロポーザルが承認され、今後、JSDFによる資金を基にネットワーク活動が開始される。JSDFの承認もISFPによるFFSの展開に少なからず関係しているため、このことに関してもプロジェクトの開始当初には予測していなかった正のインパクトである。

プロジェクト終了後の自立発展性(プロジェクト効果の持続性)

多くの技術協力プロジェクトではプロジェクト終了後の自立発展性(プロジェクト効果の持続性)が問題視されることが多い。ISFPでは比較的早い段階から(中間評価時)、このことが議論され始めた。以下、筆者が考える4つのレベルのISFPにおけるプロジェクト効果の持続性を述べる。

(1) 住民レベルの持続性

このレベルの持続性に関しては、恐らく多くの技術協力プロジェクトにおいても確保されていることと思われる。アフリカ地域で技術協力プロジェクトを実施する際、C/P機関となる組織は体制が脆弱な場合が多いから、直接的に最終受益者である農民達と接することになってしまい、住民レベルの持続性に留まってしまうのであろう。

ISFPにおいても、このレベルの持続性はもちろん確保されている。ISFPの活動を通して、300以上の農民グループ(5,000名以上の農民)がFFSを卒業した。Field dayの参加者数は15,000名以上(この数値は2008年7月の終了時評価時の数値であるから実際はそれ以上)で、Field dayを通して近隣農家に対してもグループメンバーがFFSを通して得た知識・技術が伝わっている。これらの農民はプロジェクト終了後もISFPのFFSを通して学んだ技術や知識を使い続けるわけであるから、これは一つの持続性である。また、FFSの特徴の一つは比較学習であることから、プロジェクト期間中はホストファーム内で色々な比較試験をしていたわけであるが、プロジェクト終了後は個人レベルで比較試験を実施し、より良い技術を農民自身で見つけ出し、収量や収入の増加に繋げていくかもしれない(しか



写真 2 Field day 中の PTD (比較試験区) 紹介の様子

し、このことに関しては調査を実施していないため仮説の域である)。

(2) システムレベルの持続性

ISFP の実施してきた FFS をフィールドで展開させていくためのシステム (ISFP によって開発された各種ツール、その他の知見等) は、既にエチオピアの JICA 森林技術協力プロジェクト (ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画) やアフリカ開発銀行の支援により ISFP の C/P 機関であるケニア国森林公社が実施しているグリーンゾーンプロジェクト (GZDSP : Green Zone Development Support Project) によって活用されている。加えて、ISFP の成果を基にプロジェクト終了間際に FAO の協力を得て纏められた Farm Forestry Field School Implementation Guide には理論から実践、FFS 実施のためのフロー、Special Topics の補助教材と多岐に渡っているため、今後、FFS を実施しようというドナーに大変有益なツールとなっている。ISFP は終了するが、今後、ケニア国森林公社を実施機関として社会林業関連のプロジェクトが始まった場合、そのドナーは ISFP のシステムを、そのまま活用することが出来る。また、ケニア国森林公社内に留まらず、他国・他機関において FFS を実施する場合でも、ISFP によって作成された成果品を活用することにより、FFS を展開させることが可能である。こ

のレベルの持続性をシステムレベルの持続性と考えている (ISFP によって作成された成果品は <http://www.isfp-fd.org/index.html> で入手可能である)。

(3) 集中的にインプットした 3 県レベルの持続性

ISFP では 5 年間の活動を通して、200 名以上の農民ファシリテーターを生み出した。今後、森林普及員の数の増える見込みの無い中、日当が安く (徒歩で FFS の実施サイトまで移動するのでバイク等の燃料代も掛からない)、公務員でないため異動もなく、その地域に住み続ける農民ファシリテーターをケニア国森林公社がうまく活用していけば、効率的に社会林業普及が実施できる。また、森林普及員達の中には、「農民ファシリテーターは自分よりもうまくファシリテーションをする」と言う者もいる。農民同士であり、地域の農牧林業の現状に対しても精通している農民ファシリテーターは (しかし、森林関係の知識に関しては森林普及員より劣っていることは否めない)、FFS グループメンバーにとって森林普及員よりも身近な存在であるのかもしれない。また、集中的にインプットしている 3 県においては 300 以上のグループが FFS を卒業し、多くのグループがネットワーク活動のための定例会議に出席している。今後、世界銀行による JSDF (Japan Social Development Fund) が始まれば、経済活動に必須な原資を得ることが出来るため、養蜂やドライフルーツの生産・販売等の活動が開始でき、プロジェクト終了後も更に大きな規模の活動を展開させることが可能になる (FFS を通して、組織活動のための基本は既に習得されている)。

(4) ケニア国森林公社 (ケニア国政府) レベルの持続性

このレベルの持続性の確保が最も困難であるということは容易に想像が出来ることと思われる。また、JICA の技術協力プロジェクトは政府間の技術協力プロジェクトであるため、プロジェクト終了後の持続性 (自立発展性) と言った場合、このレベルの持続性が最初に注目されることになる。しかし、前述の住民レベルの持続性のところで述べたとおり、アフリカ地域の行政機関の組織力は脆弱な場合

が多く、プロジェクトの機能の多くをそのまま C/P 機関に引き渡すことは困難なことが多い。もちろんケニア国森林公社がプロジェクトの活動をそのまま引き継ぐ必要はないが、プロジェクト終了後、ケニア国森林公社が全くプロジェクトの効果を継続させないということには問題がある。そのため、プロジェクトが集中的にインプットしている 3 県以外の地域において純粋にケニア国政府の予算のみによる FFS を実施することを実証的に試みることにした。この試みを実施するに際して、プロジェクト側からの支援は森林普及員への Training of Trainers (FFS の理論や実践を 2 週間トレーニングすること)、FFS を始めるための文房具一式の配布 (5,000 Ksh (1 Ksh=1.2 円) 程度)、数回のバックストップング (補強活動) のみであった。プロジェクトが集中的にインプットしている 3 県内では、全森林普及員に移動手段としてのバイクを供与し、日常の燃料費及び日当もプロジェクトが支出していたが、これらの日常経費を一切プロジェクトが負担しないという非常にチャレンジングな取り組みであった。しかしながら、この試みをケニア国内の数県で実施したところ、海岸地域のクワレ県ではグループを卒業まで導くという快挙が成し遂げられた。クワレ県の森林普及員は、FFS 開始当初は移動手段を持たなかったため乗合バスで移動しており (乗合バスの入り込まないところには徒歩にて移動していた)、また日当も出るか出ないかという状況の中、FFS を展開させ、見事グループを卒業まで導いた。このことは規模こそは小さいが、ケニア国政府の予算のみでも FFS を実施させることが可能であるということを示唆し

ている。

おわりに

ISFP の成果は現在では FFS の本家本元である FAO にも認められており、FAO 内において森林関連の FFS を実施しているプロジェクトと言え、最初に ISFP の名前が挙げられるらしい。① プロジェクトの開始当初に実施ガイドラインを作成し、ある程度、社会林業普及の FFS 実施のためのルールが敷けたこと、② 社会林業普及のプロジェクトであるにも関わらず農業分野の活動を多く取り入れたこと、③ 全森林普及員への移動手段としてのバイクの供与と遅延無き日当の支払い等、ISFP を成功に導いたポイントはいくつかある。しかし、専門家や C/P 達の頑張り無しには、現在の成果は得られなかった訳であるから、今は ISFP の全関係者を讃えたい気持ちで一杯である。また、個人的には筆者のケニアでの 3 年間の任期中に、経験豊富な同僚の長期専門家のみならず明治学院大学の平山准教授や FAO の萩原氏と一緒に働く機会が得られた。駆け出しの専門家として彼らから大変多くのことを学ばせて頂いた。この場を借りて、彼らに感謝の意を表したい。

〔参考文献〕 1) 小川慎司 (2006) フェーマーフィールドスクール手法の社会林業普及への導入—ケニアでの新たな取組み— 熱帯林業 No. 65 2) 野田直人 (2006) セネガル総合村落林業開発計画の経験から—地域住民の自主性を引き出す援助アプローチ— 国際協力機構